影展

京都丸紅「美展」の歴史

本年に百六十五回目の開催を迎える染織逸品会「美展」。
昭和・平成・令和の長きにわたり、きもの文化の発展に貢献してきた歴史を振り返ると共に、
より一層の研鑽を重ね、新時代にふさわしい作品の創造に邁進する所存でございます。
そして、きものを愛する方々にとってこの「美展」が、今日の染織を形作る豊かな日本文化を
発見し、堪能していただける機会となりますことを祈念いたします。

誕生

大正〜昭和初期
「あかね会」の誕生

経済・産業界の激動の時代、染織業界も不況にあえぐ中、普遍的な価値を持つ商品の開発を目指す動きが始まりました。
当代一流の日本画家や洋画家へ新しいきものの図案を依頼し、「草の葉会」(のちに「あかね会」に組織改編)を開催しました。

昭和2年
第一回「美展」開催

新しい「きもの美」を追求する「美展」の創設に邁進し、第一回「美展」が「染織逸品会」を銘打って開催されました。

鹿島英二(昭和3年)
あかね会・原画

創世期

美展第5回　振袖
中川華邨「行幸」

「金地角繋菊立木模様唐織」江戸時代
所蔵:丸紅株式会社

昭和4年
衣裳コレクションの始まり

「美展」のものづくりの礎である丸紅の時代衣裳コレクション。
能装束に始まるこれらの蒐集品は、国内でも有数の優れたコレクションとして唯一無二の輝きを放つ存在といえます。

昭和18年
「美展」休会

第二次世界大戦中、「豪奢品等製造販売制限規則」が発令され、豪華な逸品物を排した創作で続けられていましたが、ついに休会に追い込まれたのです。

新装成った丸紅商店京都支店ビル
(1938年竣工)
出典 丸紅通史

再興

昭和24年
「美展」再興

絹、人絹の統制が解除され「美展」は「染織文化展覧会」として6年ぶりに復活しました。
当時の会員が「希望に胸膨らむ思いであった」と記すほど、和装の展覧会に希望が溢れた時期でした。

美展第41回　振袖
尾嶋正三「縮緬地松竹梅に雉子文様」

昭和34年
高度成長期の中で

皇太子ご成婚をきっかけに、礼装用きもののブームがおこり、「美展」作品は逸品ものとして特選呉服市場の注目を集めました。

美展第62回　振袖
元橋音治郎「綸子地斜格子に唐花模様」

昭和54年
第百回「美展」開催

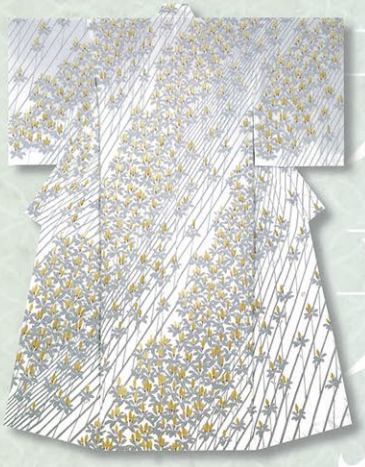
逸品会の伝統と歴史をふまえて、「伝統の美」をテーマに盛大に開催されました。

美展第101回　訪問着
松井新太郎「松皮」

初めて京都市美術館で一般公開、昭和62年に東京でも開催し、広く「美展」が知られるようになりました。
「美展」作家である木村雨山・上野為二・羽田登喜男は重要無形民俗文化財保持者（人間国宝）に認定されています。

昭和58年
「美展」一般公開

未来へ



美展第120回　訪問着
清水光美「清宴」

平成元年
第百二十回「美展」開催

昭和から平成へ新元号となり、「美展」の真価を問おうと心新たに創作への一歩を踏み出しました。

美展第153回　訪問着
松本隆男「花咲く日本」

令和5年
第百六十五回「美展」〈匠の美～継承と革新～〉をテーマに開催

逸品を生み出す「美展」の伝統は、次の新しい時代へも受け継がれています。

美展第165回　訪問着
坂井修「緑彩」

出典「昭和の歩み 美展」

美展

美展とは

染織美の芸術性を追求しつづける「美展」

昭和二年、激動の昭和史とともに産声をあげた染織美術展覧会、略称「美展」。

その誕生から一貫して染織技術の保存継承のみならず、きものの美を芸術の域にまで高めることを目指してまいりました。

その試みのため、当世一流の作家、工房、悉皆たちによるきもの創作グループが結成されました。それが美展の礎となり、その志は脈々と受け継がれ、伝統に培われた文化と職人技とが互いに競い合い、そして融合し、きものを芳醇な芸術として昇華してまいりました。斯界最高峰としての地位を示すがごとく、その高い芸術性に人間国宝の称号を得た上野為二・木村雨山・羽田登喜男をはじめとして、まさに星のごとく多くの優れた作家たちを美展から輩出しております。

第百六十五回美展のテーマは「匠の美 ～継承と革新～」。

一流の技をもって継承する技のみならず、つぎの時代を切り開くような新しい美との出会いの時になりますよう祈念しております。

時代衣裳　特別展示

時代衣裳コレクション展
～源氏物語の美～

所蔵：丸紅株式会社

平安時代に紫式部が執筆した源氏物語。
四季折々の美しい情景、魅力的な登場人物。
時代や文化を超えて、人びとを魅了してきました。
今回、源氏物語にまつわる意匠が描き出された衣裳の数々を展示いたします。
江戸文化における源氏物語の多様な広がりをご高覧ください。

▲ 薄紅縮緬地御所解桜に松藤文様振袖
江戸時代後期

▲ 白綸子地紅葉賀模様打掛
江戸時代中期

▲ 紫縮緬地御所解須磨浦文様振袖
江戸時代後期

▲
四時培花文様茶屋染帷子
江戸時代後期
所蔵：丸紅株式会社

弐代 ▶
上野為二・作

特別企画　展示販売

継承する匠の技

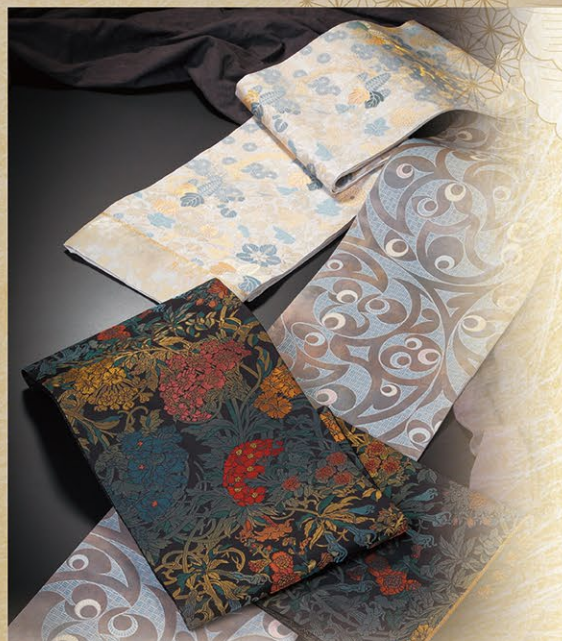
～現代作家が挑む 丸紅コレクション～

丸紅コレクションである貴重な時代衣裳をモチーフに、
「現代の匠」である染織作家の手により、
新たな息吹を吹き込まれた作品を、ご覧いただけます。
古から受け継がれ、現代に息づく作家の手技…。
その極みをご堪能ください。

▲
扇に菊枝流水文様唐織　江戸時代中期
所蔵：丸紅株式会社

▲
松井青々・作

掲載画像はイメージです。



京友禅 上野家

豪華で様々な染織技法を駆使した京友禅の中で、
友禅の美しさのみに拘り、
独自の世界を築き上げてきた京友禅の名門「上野家」。

美を装う

装うだけで日常とは異なる世界を感じられる喜び。
その力がきものにはあります。
現代を代表する作家たちの美の感性。
出品されるその一部をご紹介いたします。

紋屋井関

井関家は長い歴史をもち、
公家や将軍・大名たちの装束を織る
「御寮織物司」として
宮廷文化を彩る逸品を
織り続けてきました。
その歴史が育んだ優れた技術と
意匠の集大成を、
是非ご堪能ください。

友禅楊子糊

やさしく、力強く…
自然な動きで楊子を操りながら生地に糊を置いていく。
親子二代が情熱をかけて復興した江戸時代の至宝が、
三代目に受け継がれていきます。

有松絞り
竹田庄九郎

2019年には「日本遺産」に認定された
「有松絞り」。
400年以上の歴史を持つ
精緻な伝統の手技をご高覧ください。

Furisode

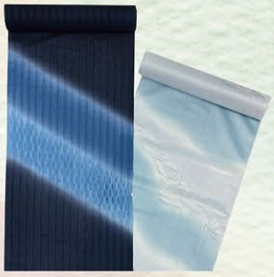
振袖

お嬢様の二十歳の
記念日を彩る振袖…
その技と美

全国紬

十日町紬

新潟県の十日町で織られる紬。節のある糸がかもし出すほっこりした風合いと、柔らかな手触りが魅力。自由な発想の色彩とデザインによって、豊かな表現をしています。



牛首紬

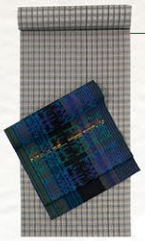
石川県の白山の麓で800年以上の昔から伝承されている紬。昔ながらの製法で手づくりされた糸から織られる生地は、気品のある光沢を放ち、しっくりとなじむ着やすさです。

結城紬

着るほどに味わいが増す、といわれる結城紬。着物ファンを魅了する「真綿」がやわらかく、空気をたくさん含み、あたたかく心地の良いその風合いを作り出します。

琉球紬

沖縄で生産されている織物。地域によってさまざまな特徴があり、沖縄の職人が丁寧に糸を織り上げた伝統的な紬は、軽く丈夫で長く着続けることができます。



与那国花織

紅型

黄八丈

お洒落着として人気の高い黄八丈。裾さばきの良さ、しゃきっとした風合いがもつ着心地の良さ、シンプルだからこそ伝わる織の風情を感じていただけます。

V&A

京都丸紅とヴィクトリア・アンド・アルバート博物館(V&A)は日本の伝統的なテキスタイルの技法とV&Aが所蔵するウィリアム・モリスをはじめとする有数の芸術家による名高いアーツ・アンド・クラフツの図案を融合させた初のコラボレーションを発表します。

Pimpernel

by William Morris (1834-96)
England, 1876

第165回

美展

趣意

「匠の美 ～継承と革新～」

「古池や蛙飛び込む水の音」で知られる俳諧の松尾芭蕉の芸術論でもっとも有名なものは不易流行論だろう。芭蕉は、時の移ろいのなかで変わってゆくさまざまな詩歌形式の根底に不変の美意識が貫かれていることを看破した。時の流れと芸術ジャンルの多様性を包み込めるスケールの大きさが不易流行論の本質でもある。

かたちも色も装飾も、すべてのものが変化してゆくのが流行だ。そして、変化を生み出すことが一種の革新であることは間違いない。とはいえ、それが一時の流行に終わらずに歴史のなかで残ってゆくこともまた重要である。そのためには、普遍的な美意識を共有する必要がある。芭蕉のいう不易の美意識を継承することによってはじめて、ものづくりは「美」を獲得することができるといってもよいだろう。

昨年来、巷間を賑わせている話題のひとつにChatGPTがある。膨大な語彙を武器にして問いに対して瞬時に新たな文章を創出してくれるというChatGPTは、たしかに素晴らしい。ただ、これに欠点があるとすれば、膨大な語彙のなかから言葉を選び出す際の美意識の欠如ではないかと思う。人にはそれぞれ、どんな言葉を紡ぎ出すかという判断を支える美意識があるからだ。それが詩人や小説家を生み出すことにもなる。ものづくりでも同様だ。過去の優れた美術品の情報をインプットしているからといって、新たな優れた作品が生み出せるわけではない。われわれの先達が残してきた美意識の系譜を継承しつつ、いまの生活空間に心地よくフィットするような、そして、さらにつぎの時代を切り開くような革新的なものづくりこそが「匠の美」といえるものだろう。

個性あふれる新たな「匠の美」を期待して止まない。

主催

京都丸紅株式会社
Kyoto Marubeni Co.,Ltd.

染織美術研究会